
もしも魔法が使えたら

ゆうじん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしも魔法が使えたら

【Nコード】

N5028C

【作者名】

ゆうじん

【あらすじ】

激・短編。主人公と幼なじみの対話です。

ことはある雑誌の広告から始まる。

「『もしも魔法が使えたら』か……」

それは携帯小説大賞の紹介。文才なんか皆無な俺だけど、賞金に釣られて挑戦してみる。

テーマは『もしも魔法が使えたら』。

「何やってんの？」

いきなり横から覗き込んできた。俺の部屋で勝手気ままに寛ぐやつ。

幼なじみの佑紀。

「ちよつと小説を……」

「あんた頭悪いのにな？ そんなの書けるの？」

失礼だよ。佑紀さん。

少しむっとしたが、確におつむのよろしくない俺は反論できない。

「ふーん。『魔法が使えたら』？ それが題名なの？」

「そうだよ。……でも、何にも思いつかないんだ。お前ならどうする？」

「どうするって？」

「もしも魔法が使えたら？」

魔法かー。と呟いて何やら考えだした。

「そうだね……」

じつと俺の顔を見つめる。何だよ？ 恥ずかしいぞ。

佑紀の顔が目と鼻の先。動揺する俺を楽しむように、悪戯っぽく笑った。

「魔法であんたを惚れさせてやる！」

自分で言って赤くなるなこの馬鹿。俺まで恥ずかしくなるだろ。

佑紀は悪戯な笑顔で俺を見つめる。上目遣いで。顔は真っ赤。

「あんななら……どうする？」

畜生、可愛いすぎんだよ。馬鹿。
だけとおかげで決まった。

俺なら……

俺が魔法を使えたら……

泣いてんだか笑ってんだか解らない表情の佑紀を見つめる。
もしも魔法が使えたら、この可愛い幼なじみを……

女性にします。

（後書き）

お気に召しましたか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5028c/>

もしも魔法が使えたら

2010年10月13日11時37分発行